
絶望に生きろ。

空と色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望に生きる。

【Nコード】

N5065T

【作者名】

空と色

【あらすじ】

絶望、それは希望を知らない少女にはわからないものだった。ひよんなことで人を好きになり、愛すことを知り、やがて憎むことを知る。

血族とは何か。

死……それは素晴らしいものなのだろう。

私は戸籍上には存在しない人間である。

闇市場の人間売買で売買された一応日本人、女。

歳、おそらく20代。

物心ついたときにはここにいたから、多分23か25違うな、26くらいだ。

わかんないけど、この箱の中で一番長く生きてるんでここのお偉いさんに気に入られたらしく、「今年でおまえが来て23年になるな」といやらしく告げて私の体を眺めていった。

おうおう、楽しいかい？

死ぬ事も許されないこの部屋で、牢獄だつてちったあマシだろうに。ガキの頃は、着るものもないままに全裸で石畳のうえに寝かされた。着れるものは布切れ一枚。

それも、すぐ破けてしまう。

うかうか首を吊つてもいらなかった。

ここが何をするところなのか、私にはいまだわからない。

自分の腕に噛み付いて食い千切った事もあった。

何度も殴られ、「使い物にならなくなる」と怒鳴られた。教えてくれよ。

母さんってなんだい？父さんってなんだい？キョーダイって？シマイって？

ここに来た奴らはだいたいそう呟きながら死んでしまう。

家族が恋しいらしい。

……家族ってなんだい？

一緒にいる奴らを家族と言つのなら、私の家族は、私の体をいやらしく眺めたあいつや、私をぶつたり蹴つたりしたあいつらだ。

あいつらが家族だ。

奴らはぶつ事を躑だと言い、蹴る事を戒めだと言った。

他の奴らは違うのかい？

家族というのは、そんなにいいものなのかい？

とある16歳の少女は、「知らないほうが幸せって事もある。」と告げて死んでいった。

長くここにいた私よりずっと疲れ果てたような絶望したような目をしていた。

「……やれ。」

私は何がしたい？考えるまでもない。目の前に転がる肉の塊を解体して片付けるだけだ。

タイムラグさえなければ、渡された刃物で自分の体もかつさばいてやるのに。

「……死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい……。」

今日もどこからか聞こえる微かな死にたいコール。

死ねば、楽になれるのかい？殴られる痛みも、蹴られる痛みもないかい？

戸籍上存在しない人間を集めては、男には暗殺を、女には死体処理をさせているらしい。

はん、馬鹿馬鹿しい。

殺すのにも死ぬのにも男も女もないだろうに。

「おいおまえ。手柄をやる。こっちにこい。」

逆らう気もなく、虚ろに男の跡をつけていくと、底にはお偉いさんがどっかかりと座っていた。

「よく働いてくれているな。おまえに服をやらう。身なりも整えろ。ただし、暗殺任務を遂行してもらう事になるが。」

黙って頷くと、彼はニヤリと笑い、私に真っ赤なドレスを手渡した。「肥えるように飯の量も多く出したのが吉と出たらしい。よく肥えたもんだ。」

そういうと、私の胸をわしづかみし、そのまま離れた。

幼い頃、彼の手下がよく私たち女の足を無理やり開き何かをぶちこんできた。

今も時折あるが、前ほどではない。彼の話では「妊娠させたら使い物にならない」「らしいからだ。

さあ、飢えた男の戦場へ。

戦い方はおおよそ教わった。

「どっからどう見てもただの女だ。」とお偉いさんは笑ったけど、私は最初からただの女だ。

後々知った事だが、顔がそれなりに良いものは飯を多めに出来るらしい。そして、その飯と言うのが、私たちが解体した人間の死肉を調理したものらしい。後は残飯のような野菜クズばかり。

「これからは栄養バランスに気を付ける。メニューも仕事も居場所もこつちで受け持つてやる」と言われ、夜の街へ躍り出たは良いが、皆他人に無関心だ。

私と同じような格好をした人もいる。

お水とか言うのだそう。

地上というのは、なんと緊張感のない世界なのだろう？持たされたナイフで擦り寄ればまわりの人間など俊殺できよう。

「。。。から来た子って君？」やたらに宝石類をじゃらつかせたおっさんがこちらを見ている。何といわれたのか、最初の方はきちんと聞き取れなかったが、スナイパーがこちらを見張っているところからしてターゲットはこいつで間違いないようだ。私は頷くと、「オッケー、車に乗って。家にいこう。」と言われ、肩に手を回された。嫌に粘つく気持ち悪い手だった。

アサシンを内太ももに忍ばせているとも知らぬであろうおっさんは私の体をなめ回すように見ると、「なかなか胸もあるし、いいじゃないか。」と告げて足を触りだした。

「ココでは嫌。」告げた言葉は単調で、なんとも感情がなく、無機質だった。だが、相手がそれを気にした様子は見せない。

ターゲットの家につくと、頭を下げたいかつい人達に歓迎された。

スナイパーは、こちらの動向をじつと観察している。

首を動かすわけにはいけないので、ざっとだが、とりあえず2人は教えられた所にいる。

スナイパーがミスするとは思えないが、ミスした時用に私がいる。

特別、意味と、存在。

私はただ、スナイパーが狙いやすい位置にターゲットを誘導し、ターゲットが撃たれたら「キヤー」と騒いで逃げるだけだ。下には見えない所に車が停めてある。

で、動いている人が一瞬にしてただの肉の塊となるのを私ははじめて目の前で見届けたわけだが……ここどこだっけ？知らぬ部屋にいて、服を着たまま椅子に腰掛けていた。近くには銃が一丁……。

触れようとした瞬間、後頭部に何かが押さえ付けられた。「動くな。私は手を下ろすと、ゆっくりと後ろを向いた。

「動くなと言っている。」さらに額に押しつけられた銃を気にも止めず、無抵抗なまま彼を見た。

彼は、「お互いに自殺しないためにお互いを見張れって言われてた。あんた見てるところでちまで氣い狂いそうだ。」と告げて銃を下ろした。

「……殺さないの？」

「メリットがないからな。それよりあんたを生かして襲った方がメリットある。」ベッドに押し倒されたが、抵抗する気もなければ、抵抗するものだとも思わずに死んだ目のまま彼を見上げた。彼は苦笑し、「おいおい、マジ？」と告げると、再び私を見てあきれた。どうやらあそこは地獄で私は地獄を見すぎてきたらしい。

そんなこんなで死を恐れない私は、いつのまにか彼と大出世をとげ、いつからか暗殺界ではそれなりに名の知れた殺人犯となった。

「……ティ。死にたいとは思うか？」

「常に。でも死ぬわけいかねーよ。俺は戸籍上存在しない人間でも病気の母親がいる。」

「ティ、母親に会いたいか？」

「会ってるから別に。」

「ティ……母親とはどんな存在だ？」

「……エム……親いないのか？」

「私の戸籍はない。捨て子って話だ。それもよくわからない。物心ついたときにはこの世界にいた……すまない。私情を話すぎたな。」

お互いに本名を名乗らずに、背を向けて寝る。

普段ならそれが当たり前だった。だが今日は少しばかり違うようだ。

「エム、人のぬくもりってえのは偉大なんだぞ。」

ギツというベッドが軋む音がして、私はティの腕に包まれた。

「……そうだな、温かいな……。」それだけ言って寝ようとする、

「寝たら襲うぞ。」と何故かティに怒られた。

「じゃあどうしろというんだ。寝るなどでも？」

ティの顔をじつと見てから目を反らした。

……嫌いだ。ティは生き生きしすぎている。私には眩しすぎる。初めてティを嫌いだと思った。それまではなんとも思わなかった。

それから寝ようと目を閉じた。

「襲うつつってんだろ。」

「ご自由に。」

「あつぞ。」

首もとにモゾモゾとした感覚がくる。それはだんだんと胸元へ下がつてくる。

思わず目を開けると、ティを直視し、「何をしている？」とたずねた。

「襲ってる。」

「……そこは鎖骨だ。性器じゃない。」

「知ってる。」

「……さつさとやって気が済んだら寝ればいい。」

「……エム、いい加減にしろ。まずは俺を見る。俺はお前の相方なんだぞ？何故目を見ない。」

「見たくない。」

「何故。」

「ティが嫌いだ。ティは……私には眩しすぎる。」

「……成る程、愛してほしいのに実際には戸惑うてやつか。別にいいけど。俺はエムの事嫌いだよ。だって俺の顔ちゃんと見ねえもん。」

「お互いに嫌いならそれでいいじゃないか。おやすみ。」

「ああ、好きなようにやつてるよ。」

ティがベッドから離れた瞬間、唇に何かが押しつけられた。強引に口を開こうとしてくる。昔にもあった。嫌な記憶だ。性器を口に突っ込まれ、口内に得体の知れない何かを出された。

お世話にもおいしいとは言えなかった。だが、逆らえば殴られる。

そんな思いから基本的に強いられれば何でもやった。

その癖はいまだに抜けないらしい。開かれた口からざらついた舌が私の口内をかき回す。

妙に息苦しい。なんだこれ？なんなんだ？

途中、咳き込んで起き上がると、ティを睨んだ。

「エムはキス初心者か。」妙に得意げなティにディープキスとやらを教えこまれ、もう一度よくわからない感覚を味わう。

酸欠になりそうだ。

「ティ……もう無理だ。疲れた。」ぐつたりとティに寄り掛かると、ティは疲れたと言った私をほったらかして首筋に顔を埋め、胸元にも顔を埋めた。

ピンクのあざがそこにはできていた。

「ティ……これはなんなんだ？ただ性器と性器をこすりあわせるだけが欲求を満たすことではないのか？」

「んなわけあるか。普通はもっと大切にすべきもんだぞ。」

その夜、私ははじめて本来の意味を知った。そして、今までにはない妙な感覚も一緒に。

翌朝、いつまでたっても昨日の夜の出来事が脳裏に焼き付いて離れなかった。私は変態にでもなったのだろうか？

「……Dか……思ったよりあるな。」

驚いて声がした方向を見ると、ティが私の下着を見ていた。

「ティ、きさま……昨日私に何をした！」

「……ムラムラしたからヤツた。」

「媚薬か何か盛ったのか!？」

「……なんも？」

「嘘だ！」

「服着ろよ。」

「嘘だ……!じゃあ何故昨日の事が離れない……!」

私が嘆いた瞬間、ティがニヤリと笑った気がした。

「そんなによかったですか。もう一回やるか？」

「バカ言え。それより、下着、かえしてくれないか。」ティに手を伸ばすと、その手をつかまれ、そのまま押し倒された。

「よかつたんだろ？」

「……今までののはこんなことにはならなかった。よってお前が何かを盛った。それ以外に思い当たる事はない。」

「はいはい、じゃーもう一回ねー。」

よくわからないまま、とりあえず2回目が終わった。変だ。変だ。

変な声が出る。何故だ。

ティは、あれを特別な行為と言った。ならば私にとってのティは、特別な存在?だから私が狂った?特別ななんてわからないから。そうか、そういう事か。

シャワーから上がると、髪の毛から滴る水を気にも止めずにティを呼び止めた。

「ティ、お前は私にとって特別な存在だ。」

「……そりゃどうも。」

ティは目を丸くしたままだったが、やがて「あれ?でも、特別な存在ってちよつとヤバくね?」と言って、管理された朝食を口にしながら私の前に座った。

知る者は……。

「何がヤバいのかは知らないが、とりあえずティが特別だから私がおかしくなるんだ。すべてはティのせいだ。」もりもり野菜を食べはじめると、ティは、「いきなり積極的だなあ。」と呟いた。いつになくのどかな早朝だった。

その後、ティを好きなのだと自覚したのはずっと後だった。不意にティに抱き締められ、好きなのだと思った。

ティは、私の知らないことを教えてくれた。

これからも相方で居続けると何の迷いもなく思っていた。

「ミスった！ティ！車を出してくれ！」

「OK！」

「さて、このやろう！」

「エム、危ない！」

それは一瞬の出来事だった。

車のガラスが割れ、粉々になり、私はティに守られ、全てがぐらついた。

気づいた時にはティがら発ほど銃弾を打ち込まれていた。

「ティ！ティッ！くそっ！」

ティを運転席に乗せたまま運転し、なんとか相手をまくと、家となっていた居場所にティを運び込んだ。

「ティ、しっかりしてくれ……ティ！」

「……エ……ム、俺……かっこいいいな……。」

「喋るな！」

「手当ては無駄だ……俺、エムの……本名……まだ……知らねえのになあ……。」

「嫌だ！嫌だ！いくな！ティ！」

「……俺……ティじゃねえよ……関谷、関谷^{せきや} 竜樹^{りゅうじ}ってんだ……。」
「たつき……？私は……私は……わからない！ないんだ！名前がな

いんだよ！いかないで、いかないでたつき！私はまだお前に好きだとも言っていないのに……ッ！」

最後に竜樹と名乗ったティはかすかに口の端を持ち上げると、そのままガツクリと首を落とし、動かなくなった。

「うああああああああ！」

涙の後に心に憎しみを宿し、復讐を誓った。竜樹と過ごした時間は今までにないものだった。きっと竜樹がいなければこんな思いもせずに済んだのだろう。でも、それでも……やはり竜樹を恨めない。もはや死んだ身。私は生きていても呼べないこの身で生きるだけなのだ。

進め、やるべき事をしろ。なんとしてでも奴を殺してやる。

竜樹の手から竜樹^{ティ}が愛用していた銃をとった。

「絶対あいつ殺してやるから、待ってて。」

まだ暖かいティに口付けをしてからその場を離れた。

死体が見つかったって私達はニュースになりさえしない。存在しないはずの者として、ゴミのように捨てられるのを待つだけ。あまりに人気のないところだと、動物たちに肉を食われて自然に帰れるかもしれない。

……ああ、なんと恍惚とした死だろう。

私達は……少なくとも私は、死を待ちわび、生きることを知って、さらにこの身の価値がわからなくなって人をただの肉の塊にする事を覚えたただの殺人兵器でしかない。ならば、今やるべき事は、一つ。

“コロセ”

大きく見開かれた目は、ターゲットしかとらえない。この目から無事に逃れられる奴など存在しない。

さあ、“殺せ、殺せ、コロセ”人間がただの塊になるまでのショーの始まりだ。

「か、勘弁してくれっ！」

気が付けば私は、一番憎い男の前に立ち、見知らぬ豪邸で、大の大男がみつともなく無様に震えながら私に媚びている様を見ていた。黙ったまま、そいつを見下すと、何も言わずに脳天をぶち抜き、静かにその場を去った。

終わったのか、この手には実感がない。だが、体は酷く傷ついていた。

私は……ただの殺人人形。依頼された人物を暗殺するために地上に存在する。それ以上の意味を持たなければ、それ以下の言葉もない私の死もまた、価値がなく、私の存在は誰かを喜ばせることもない。買うのは恨みだけ。永遠に付き纏う、誰かを殺した代償だけ。

意味のない命なんてない……綺麗事を耳にした。実際私もそうだったらいいと思った。私とテイの存在も否定されずにすんだら良いのに。だが事実はやはり綺麗事とは違う。この世の中、意味のない命であふれかえっている。無駄に過保護に育った人間達は、無駄に綺麗事を並べて、無駄に生き延びた私達のような存在をあたかも簡単に切り捨てる。

ホームレスのおじちゃんがどこかを眺めていた。いや、一点を見つめてはいるが、どこにも焦点は合っていない。彼らもまた無駄に豊かに育った人間達から人間ではないと切り捨てられた存在なのかもしれない。

でも、地上で堂々と生きていられるだけいいじゃないか。私は中学生達に殺されてもいいから一度でいいから、地上の普通の……こんな血塗れじゃない生活を送ってみたかった。

銃を頭に突き付けた瞬間、バンッ！という音と共に銃だけが弾き飛ばされた。

銃は人気のない道をカラカラと私から遠ざかりながら転がっていく。なかなかの腕前のスナイパーだ。この道を専門職とした者だろう。

「で、次の見張りはあるか？」私がゆっくりと振り替えると、「俺は普段は干渉しない。お前も俺に干渉するな。」と言って去ってい

った。

顔は見えなかった。背丈はティより高く、体付きは細くてどこか異様だった。まあ、私とティがおかしかったのだ。普通は殺し屋同士、互いにあんなに干渉するわけがない。私達是一緒に居すぎた。私がただの殺し屋から、ただの女に^{ティ}戻っていく。体が腐っていくみたいだ。思い出したくもないのに竜樹が私の身体に刻んだ快樂がどこからともなくよみがえり、私を侵食する。何故ただの女なんかにしたんだ……ただの肉の塊でよかったのに。ティは、私を肉の塊から人間へと変えた。私もティを受け入れた。戸惑いはしても、抵抗するものだと言え思いもしなかった。それが幸せだった……たった一時でも……。

違う……ただの肉の塊がたった一時でも幸せを求めたから罰が当たったのだ。何故いつ死んでもかまわない私が生きて、生きるべき目的があつたティが死ななければならなかった？もう一度、絶望の世界へ帰れ。

もう二度と私は誰かを受け入れず、もう二度と私は幸せを求めたりなんてしない。

……幸せを求めた結果が同じなら、幸せを求めぬ方がまだ幸せというものだ。

全身に力を入れて強く大地に踏ん張って立っていた。

まあ、せいぜいこの身が尽きるまで生きてやるさ。誰かの命を奪いながらね。どうせ絶望の中にいるなら、もうどうなったってかまいやしない。

ティ愛用の銃を拾い上げると、私は暗やみの中へと姿を消した。

——その後、彼女や彼女がいた組織がどうなったのかを知る者はいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5065t/>

絶望に生きろ。

2011年5月23日23時55分発行